文学の虫の眼紀行

何仁武
交換留学生 中国

私は日本文学が好きである。正確に言えば、日本近代文学が好きである。もっとくわしく言えば、村上春樹が好きである。日本文学が好きになった時は闇だらけの高校時代だ。文学の世界はそのときの私に臨時避難場をくれた。それが日本文学との縁の始まりだ。

大学で日本語を勉強し、今年交換留学で日本に来た。嬉しい反面緊張もした。今度は教科書の日本ではなく、本物の日本だ。目の前は村上春樹が住んでいる国で、羅生門と雪国の日本だ。文学に夢中である私はこの文学の虫の目で何が見られるのかと自分に質問しつつ、日本の生活を始めた。初めまして、日本文学が生まれた日本。

初めての日本だが、むしろ初めての和歌山といった方がいい。今の私にとっては日本イコール和歌山だ。これから読んでいただきたい内容も全て和歌山での見聞だ。

大阪府の隣にある和歌山県の位置は微妙だ。県庁所在地で、人口が 30 万ぐらいの和歌山市は難波と比べると、田舎といってもよい。しかし、たとえ田舎の和歌山だとしても、私はいくつかの文学のことで感心した。

最初に気づいたことは文庫本である。大和民族は読書好きの民族の一つだと中国でよく言われている。私はそれを信じている。それに、日本に来たあとそれをいっそう信じる。二つの例をあげる。一つはサラリーマンのことだ。和歌山市へのサザンの長い座席に座った彼は疲れたようだった。しかし、彼は隣にいる目を閉じた女性の邪魔にならないように、ゆっくりカバンから文庫本を出して、楽しそうに読み始めた。もう一つは、和歌山大学前駅で難波への急行を待っていた高校生のことだ。急行がきていない間、彼女はずっと文庫本を読んでいた。この二つの例はすごく日常的な例だが、正直に言って、その二人の本を読む習慣に感心した。中国大都市の状況は分からないが、同じ田舎のふるさとではそんな人があまり見られない。そういう人があまりないというよりむしろゼロだと言えよう。

書店もサプライズである。文学の虫にとって、日本の書店はまるで天国のような存在だ。なぜかというと、本の種類が多く本屋も種類が多いからだ。和歌山市はそんなに大きくない町だが、書店は少なくない。ふるさとの書店と比べると、和歌山は本の種類がずっと多い。しかも、本屋付きのスーパーもある。会館の隣のウェイという本屋はメッサというスーパーマーケットの中にある。初めてメッサに行った時に驚いた。本屋はスーパーの付属ではなく、逆にスーパーから独立して大きな範囲を占めて様々な本が並べられている。ふるさとにはこういう場所がない。それだけではなく、もっと驚かされたのは本の種類の多さだ。書店には漫画や雑誌や文庫本や絵本や地図など、さまざまなジャンルの本がある。涙が出てきた。長年単調な本屋で本を買った悲しみのせいで。

ブックオフのような古本屋も日本らしいと思う。また、涙が出てきた。中国では古本屋が利用できないからだ。日本では、愛書家にとっては、古本屋がまるで毎日お得商品を買

えるスーパーのような存在だ。日本にはいい本は多いが、値段が高い。本を買うこととお金の節約は両立できない。だが、古本の場合にはそういう心配がない。感じがいい古本でも安い値段で手に入れられる。しかも、古本屋では昔刊行した本を買うこともできる。

ところで、イオン駅向こうの出口の左側に本を読むスペースがある。喫茶店でもないが、本屋でもない。お客さんは入り口の向こうにあるコーヒーを作っている場所で飲み物を注文して、このスペースに戻ってくる。戻ったら、飲み物を飲んだり、本を読んだりしている。

最後は万葉館へ行ったことを話したい。先日、大学の先生のフィールドワークに参加した。万葉館という和歌の博物館へ行った。小さな博物館だが、中は意外に面白い。一番印象的なのはロビーにある和歌のゲームだ。一つの和歌の内容を二つに分けて、筆で木の板に書かれていた。分かれた和歌を繋げるゲームだ。和歌山の名に由来する和歌もその一つだ。「若の浦に　潮満ちくれば　潟を無み　葦辺をさして　鶴鳴き渡る。」この和歌は、中国人の私は漢字が分かっているから、おおむね理解できた。これまで和歌山で生活した経験から、この和歌に共感した。そして、日本人がいかに伝統的文学を大切にしているかもわかった。そして、幼い時に唐詩を暗唱していたことを思いだした。私は、文学の役割は一体なんだろうと、よく聞かれた。ノルウェーの森の翻訳者の林少華は「文学は各民族の精神の花園である」と言った。私もそう思う。

私は文学の虫である。それに、この文学の虫はもう三カ月ぐらい日本で生活している。目、耳、頭でいろいろ見た、聞いた、考えた。一番印象的なのはあるいは帰国したあと一番伝えたいのは、やはり日本の文学の雰囲気だ。日本人は現代文学はもちろん、伝統文学さえも大事に守っている。

このような体験や思考によって、日本文化の強さの理由がわかってきた。明治時代の前後に、日本はまず中華文明さらに西洋文明を学んだ。その時の日本は偉い文明の学生だったが、今はそうではない。逆に、今は他の国が日本を学んでいく。日本人は昔の偉大な文明に基づき、自ら日本人らしい現代の強い日本文化を生み出した。

その一方、昔偉大であった中華文明を創った中国は現代文化の誇りは一つもない。四大文明を持つ昔の中華のイメージは外国人にとって相変わらず強い。だが、その原因を考えてみると、中国の伝統文化が強いというより、むしろ中国の現代文化が弱すぎるのだと思う。文学と科学、そして、農耕の伝統文明と機器の現代文明、さらに、自己文化と外来文化。この三つの関係のバランスは一体どう保ったらいいかと、中国人は戸惑う時にちょっと頭を下げて東の島国に目を向けると、ヒントが出てくるかもしれない。